九州オルガン針 ㊤

会社の財産「多能工」養成

人口わずか5600人の町を拠点に、多彩な製品を世界に向けて出荷している会社がある。玉東町に本社と工場を置く九州オルガン針（西住正二社長、140人）。5月半ば、精密部品製造課係長の福田充祥さん(26)は、医療器具の部品を仕上げる最終工程を担当していた。

午前中は、第1工場で電気メスの先端になる針のように細いステンレス棒を化学薬品で処理し、表面を鏡のように仕上げる。午後は第2工場に移り、心臓カテーテルの案内針にする直径1ミリに満たない金属パイプの長さをそろえ、先端の切断面の微細なささくれを手作業で磨き上げた。

いずれの製品も、国内外の医療機器会社を通して世界各地に届けられる。「どちらも人の体に触れる部品なので患者の立場になって作る」と福田さん。一番大切なことは、という問いに、「丁寧にやること」。答えはあっさりしていた。

同社はミシン針の生産シェア世界一を誇るオルガン針（長野県上田市）のグループ企業として、1971年に創業。当初は親会社に工業用・家庭用のミシン針を納めていたが、2007年から金属の精密加工技術を武器に異業種にも参入。製品は頑丈な畳針から繊細な楽器の部品まで680種類、納入先は80社に増えた。

家電の振動センサーに使うピンのように年産1億個の大量生産品もあれば、考古学調査の土器の型取り器のように1年で50個前後の注文生産品もある。取締役管理本部長の池松宗幸さん(64)は「大量生産の方が効率的ではあるが、小口の要望も大切にしてきた。品種の多さは、その結果」と振り返る。

少量生産でも品数が多ければ受注の総量は増える。県内の中小企業に詳しい「くまもと産業支援財団」（益城町）の小原信事務局長は、「少量多品種生産は今や産業界の大きな流れ。固定した納入先や製品に依存しないので、不況などのリスクにも強い。九州オルガン針の経営はその例の一つ」と見る。

ただ、製品の種類が多いので工程は複雑になり、生産量の変動もばらつきがある。そこで生きてくるのが福田さんのように複数の仕事ができる「多能工」たちだ。日ごろから2～3の工程をこなし、一つの仕事が落ち着けば別の工程に回る。多い時には1日で4～5種類の仕事を掛け持ちすることもある。

同社は新分野に参入した07年以降、年間教育計画を作り、多能工の養成に努めてきた。精密部品製造課長の早野守さん(42)は「製造業は勘やコツが大事なので、現場で学び、経験を積み上げてもらうしかない。長い時間をかけて育ってくれた社員は、会社の大切な財産」と話す。

それを可能にしたのが、会社が掲げる終身雇用と正社員主義の経営だ。

（梅野智博）

地方でしぶとく 6

カテーテル針の加工機械を調整する九州オルガン針の福田充祥さん＝玉東町

2014・6・14

くまもとの明日 KUMAMOTO FUTURE 第7部